２００３年１２月３０日

人間科学研究科委員長殿

西條剛央氏　博士学位申請論文審査報告書

下記の審査委員会は、西條剛央氏の学位申請論文について、人間科学研究科の委嘱を受けて審査をしてきましたが、２００３年１２月１７日に審査を終了しましたので、ここにその結果を報告します。

記

１．申請者氏名　　西條剛央

２．論文題名　　母子間の抱きの人間科学的研究：
ダイナミックシステムズアプローチの適用

３．本文

（ａ）主旨

本論文は、「抱き」という母子間の重要な行動について、人間科学的見地から総合的に考察しようとしたものである。とくに抱きを、方法論としてはダイナミックシステムズアプローチ（ＤＳＡ）による母子間の自己組織化的創発現象としてとらえ、さらに理論的には成立と減衰の両側面からその発達をとらえようと試みている。

（ｂ）概要

１章では次の２点が中心に論じられている。第１に、人間を全体的に理解するための人間科学的研究法の提案、第２に、それを踏まえ、現在の発達研究の枠組みを再考し、横断研究と DSA に基づく縦断研究を効果的に組み合わせることにより人間科学的発達研究法とすることの提案である。さらに、求心的側面に偏重してきた「抱き」をより包括的に捉えるために、母親が自分の子どもを次第に抱かなくなって行く発達的過程を「離抱」と名付け、『求心?遠心』の両側面からアプローチすることを提案している。これらの視点を掛け合わせることにより、母子間の「抱き」を多面的に理解するため４つの研究が行われた。

２章では、各研究成果が示された。研究１では、生後 8 日から 2 年 1 カ月までの乳幼児とその母親 29 組を対象に抱きの横断的観察が行われた。母親の諸姿勢における抱きの場面が撮影・分析された結果、以下の 2 点が示された。(1)子も抱きの成立・維持に手で支えるなどして積極的に関与しており、その行動は子の姿勢発達に伴い増加する、(2)母親の抱き方は、抱く際の母親の姿勢状態や乳幼児の姿勢発達の段階によって異なる。以上のことから、母子が姿勢という身体要因を基盤として、互いに関与することで、抱きが成立・維持される相互的行為であることが示された。

研究２では、生後 1 カ月の乳児とその母親 16 組を対象として、1 カ月から 7 カ月時まで 1 カ月おきに抱きの縦断的観察が行われた。そして、DSA に基づいた検討の結果、縦抱きの移行プロセスには、以下の２パターンがあることが明らかとなった。(1)乳児が抵抗を示しはじめると、母親は間主観的な解釈を介して乳児が安定する抱き方を探索し、その結果「抵抗」の収まる縦抱きに収斂する，(2) 身体情報としての乳児の首すわりが母親に縦抱きをアフォードする。

研究３では、母親が自分の子どもを次第に抱かなくなっていく離抱現象の概観を明らかにした。1? 13 ヵ月の乳幼児を持つ母親 298 名を対象とした質問紙調査を行ない、抱き時間や乳幼児の発達に関する情報が集められた。その結果、その結果、(1)姿勢運動発達、(2)身長、(3)体重、(4)授乳形態、(5)子の体を動かす行動、(6)子の抱きから降りたがる行動がそれに影響を与えていることが示された。

研究４では、生後 1 カ月? ３カ月の子どもを持つ母親 21 組を対象として、最長４０カ月まで 1 カ月おきに離抱の縦断的調査が行われた。DSA に基づき、個々の母子における離抱過程が記述されるとともに、授乳抱き、通常抱き、おんぶ抱きの 3 側面から離抱に影響するコントロールパラメータが検討された。個々の発達軌跡に基づいて検討した結果、離抱過程は多様であり、かつ非線形の様相を呈し減少することが示された。乳児の発達的側面から離抱に影響を与える要因を検討した結果、主に姿勢運動発達と体重が影響を与えていることが示された。

最後に 3 章で母子間の抱きを説明するモデルが提示された。母子の身体を基盤としたやりとりの結果、子の発達にともない抱きは相互的に成立・変化し、また同時に離抱が促進された。これは抱きが母・子のいずれかの行動に還元されえず、事前のプランニングによらないで自己組織化するものであるということが示唆された。さらに、それらの抱き研究の結果をもとに、行為者が何をし

ているかを理解するためには、完了形ではなく進行形として行為が現象している行為主体に視点をおき、解釈を再構成する必要のあることが論じられた。そしてこの視点が、抱きや母子関係のより妥当な現象を理解するのに有効であることが示された。

（c）評価

本研究の評価すべき点として、まずその人間科学的視点の追求をあげることができる。抱きという表現が自ずと示唆するように、この行動は母親側の関わりかけとして取り扱われてきたが、本論文ではそれが、母子の相互的行為であるという視点に貫かれて分析されている。そして、ダイナミックシステムズアプローチという生態心理学の方法を発達研究に活用し、抱きを両者の行為から創発されるものとして記述することに成功している。このことは、個の縦断的発達変化過程の描写とそこにおけるコントロールパラメータの特定という作業によって可能となっており、それは年齢群の平均値による比較という発達研究の常套的方法への重大な問題提起となっている。

これらの分析においては、母親の主観的解釈・行動・子の身体の物理的属性といった異なる情報が縦横に重ね合わされ、その結果として母子相互の身体間で実現している自己組織化過程が描き出されており、これは母子関係の発達的検討において視点の基本的な修正を迫る指摘ともなっている。

本研究ではさらに、「離抱」という独自の概念を導入して、抱きの減衰過程をも考察の対象にし、抱きの成立と解消の過程をひろく考察している。対人関係はすべからく親和的要素と反発的要素の両面から記述されなければならず、母子関係といえどもその例外ではない。とくにその反発性を親和性と交錯させることによって、母子関係の両価的な特性が初めて浮き彫りにされるのであり、本研究はその検討を通じて、単なる心理的な母子関係論にとどまらず、母子間における「身体」「接触」の意味を探るという発達行動学的考察にもつながっている。このような指摘は、心理主義や愛着主義という今日の母子関係の発達心理学的研究がもっている偏向性に対して、意味のある反証ともなっている。

さらにいえば、本研究は人間科学的方法論を追究し、その理論化をめざすという意欲にあふれている点も評価したい。その志向性を本研究で十全に実現し得たとは必ずしもいえないが、定量的・定性的ないくつかの手法を併用し、横断・縦断法を組み合わせ、抱きと離抱の両面にわたって母・子双方の能動的関与を検討するという姿勢のなかに、この問題を学際的に追究しようとする態度

が認められ、そのことは今後の発展を期待させるものである。

以上の点から、本審査委員会は、本論文が博士（人間科学）にふさわしい研究であると判断する。

４．西條剛央氏　博士学位申請論文審査委員会

主任審査員	早稲田大学　教授　博士（人間科学）大阪大学	根ヶ山光一
審査員	早稲田大学　名誉教授　文学博士（早稲田大学）	春木豊
審査員	早稲田大学　教授　文学博士（早稲田大学）	濱口晴彦